

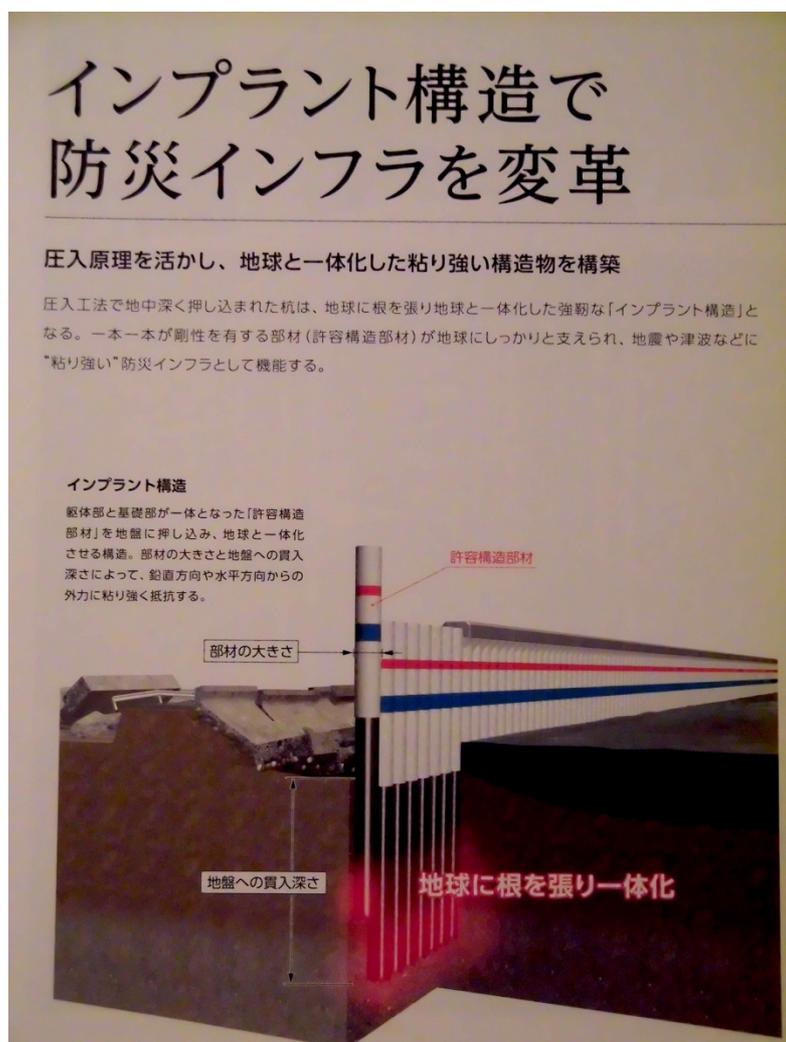
## 第31回 国と国土はちがうのか？

IT生

このところ、あきれたり、感心したり忙しいことであった。

ある役所の防災担当者が自治体に国の施策に協力するよう求める場面に立ち会った。くだんの役人は、南海トラフ地震によって被災すると想定されている自治体の首長を前に、「国」が検討している災害情報についての協力を迫った。

その首長は、「当自治体では、避難対策は十分におこなっており、屋上屋を重ねるような情報をだされては、住民は混乱する」とけんもほろろであった。このやりとりをきいていて、ハテ、と思った。役人がいう「国」とはなんぞや？と。おそらく、自分が所属する省なのだろうと。



防災の最前線にたつまで、苦節半世紀におよんだという防災堤防の新工法

その翌日、堤防を建設する会社の社長にお話を伺う機会があった。この会社では、騒音をださず、大規模な仮設工事を必要としない杭打ち機を開発しており、現在、南海トラフ地震の被災想定地域の沿岸部の堤防を強化する工事を請け負っている。社長は、「防災こそ国の要。人々の安寧に寄与する」と一途に思い、「国土防災」を社是とし、技術を磨いてきたという。

社長のいう「国土」とは、とりもなおさず、「人々の生活そのもの」である。前述の役人の「国」と社長のいう「国土」。この似て非なるもの隔たりにこそ、現在の防災が進まぬ原因があるのだと、この一両日のできごとに、首をかしげざるを得なかったのだ。

もしや、真の災害は、南海トラフ地震による猛威よりも、今そこにある危機、「国」として、全く、国民の生活に思いをはせることのできない国の役人のふるまいにあるのではないか、と思うに至り、このところの「忖度」ばやりにまたもうんざりしたのだった。

(平成 30 年 2 月)